

例外領域上の theta 関数について

北大 理学部 長岡昇勇

複素  $2\ell$  次元空間  $\mathbb{C}^{2\ell}$  内の例外型 tube 領域  $\mathcal{D}$  上の保型形式は W.L. Baily, Jr. によって研究された [1]. 彼は、この論文の中で上記の領域  $\mathcal{D}$  に推移的に作用する  $E_7$  型の代数群  $G$  のある算術的部分群  $\Gamma$  の性質を調べ、 $\Gamma$  に関する Eisenstein 級数の Fourier 展開係数の有理性を証明している。

一方、Jordan 代数に対する theta 関数の一般論は H.L. Resnikoff によって研究がなされている [3]. ここでの目的は、Resnikoff の idea に従って 例外領域  $\mathcal{D}$  上の theta 関数を定義し、 $\Gamma$  に関する保型形式を実際に構成することにある。

1. 例外領域  $\mathcal{D}$

まず、 $L_{\mathbb{R}}$  を実数体  $\mathbb{R}$  上の Cayley 代数とし、その標準的な basis を  $e_0, e_1, \dots, e_7$  で表わす。non associative な

$\mathbb{Q}$ -多変環  $\mathcal{L}_{\mathbb{Q}} = \mathbb{Q}e_0 + \mathbb{Q}e_1 + \dots + \mathbb{Q}e_7$  の中の integral Cayley 数  
 数となす maximal order を  $\mathcal{O}$  と表す.  $M_3(\mathcal{L}_{\mathbb{R}})$  を  $\mathcal{L}_{\mathbb{R}}$   
 上の  $3 \times 3$  行列全体のなす集合とし,  $\mathcal{J}_{\mathbb{R}} = \{X \in M_3(\mathcal{L}_{\mathbb{R}}) \mid {}^t\bar{X} = X\}$   
 とおく. 明らかに  $\dim_{\mathbb{R}} \mathcal{J}_{\mathbb{R}} = 27$ .  $\mathcal{J}_{\mathbb{R}}$  の元  $X, Y$  に対して,  
 $X \circ Y = \frac{1}{2}(XY + YX)$  と積を定義することにより,  $\mathcal{J}_{\mathbb{R}}$  は  
 例外型の単純 Jordan 代数となる.  $\mathcal{J}_{\mathbb{R}}$  上には, 多項式関数  
 $\det$  が定義されていることに注意しておく.

$\mathcal{K} = \{X \circ X \mid X \in \mathcal{J}_{\mathbb{R}}\}$  とおく. さらに  $\mathcal{K}$  の部分集合  $\mathcal{K}^+$  を  
 $\mathcal{K}^+ = \{Y \in \mathcal{K} \mid \det Y \neq 0\}$  と定義する.  $\mathcal{K}^+$  は 既約な自己共  
 役等質 cone の一例となっている.

$\mathbb{C}^{27}$  を  $\mathcal{J}_{\mathbb{C}} = \mathcal{J}_{\mathbb{R}} \otimes_{\mathbb{R}} \mathbb{C}$  と同一視し  $\mathcal{V}$  をこの中の tube 領域  
 $\mathcal{V} = \{Z = X + iY \mid X \in \mathcal{J}_{\mathbb{R}}, Y \in \mathcal{K}^+\}$ ,  
 と定義する.  $\mathcal{V}$  は non compact 型の Hermite 対称空間で  
 例外領域と呼ばれる.

## 2. 例外領域 $\mathcal{V}$ 上の theta 関数

まず 次の様な記号を導入する.

$$X \in M_{3 \times m}(\mathcal{L}_{\mathbb{R}}), Z \in \mathcal{J}_{\mathbb{C}} \text{ に対して } Z \langle X \rangle = \frac{1}{2} \{ {}^t\bar{X}(ZX) + ({}^t\bar{X}Z)X \}$$

$$X, Y \in M_{n \times m}(\mathcal{L}_{\mathbb{C}}), \mathcal{L}_{\mathbb{C}} = \mathcal{L}_{\mathbb{R}} \otimes_{\mathbb{R}} \mathbb{C} \text{ に対して } \text{tr}(X, Y) =$$

$$\text{trace} \left[ \frac{1}{2} ({}^t\bar{Y}X + {}^t\bar{X}Y) \right].$$

$$M_{3 \times m}(\mathcal{L}_{\mathbb{R}}) = \mathbb{R}^{24m} \text{ 内の lattice } \mathcal{L} \text{ と } M_m(\mathbb{R}) \subset M_m(\mathcal{L}_{\mathbb{R}})$$

と見たととき,  $V \in M_m(\mathbb{R})$  で  ${}^tV = V > 0$  (正定値) なる行列  $V$  を考える. そこで,  $\mathcal{L}$  と  $V$  に付随する, theta 関数を

$$\theta_{\mathcal{L}}(Z; V) = (\text{vol } \mathcal{L})^{\frac{1}{2}} \sum_{M \in \mathcal{L}} \exp[\pi i \text{tr}(Z \langle M \rangle, V)],$$

で定義する.

ここで  $Z \in \mathbb{F}$ ,  $\text{vol } \mathcal{L}$  は  $\mathcal{L}$  の基本領域の,  $M_{3 \times m}(\mathbb{L}_R)$  上の標準的 Haar 測度に関する体積を表す.

主結果の一つは 次の様に述べられる.

定理 2.1 関数  $\theta_{\mathcal{L}}(Z; V)$  は  $\mathbb{F}$  上の正則関数であり, 次の変換則を満足す.

$$\theta_{\hat{\mathcal{L}}}(-Z^{-1}; V^{-1}) = |-iZ|^{\frac{m}{2} \times 8} |V|^{\frac{3}{2} \times 8} \cdot \theta_{\mathcal{L}}(Z; V),$$

ここで  $\hat{\mathcal{L}}$  は  $\mathcal{L}$  の dual lattice,  $Z^{-1}$  は  $Z$  の Jordan 代数としての inverse,  $|Z| = \det(Z)$ .

関数  $f: M_{3 \times m}(\mathbb{L}_R) \rightarrow \mathbb{C}$  を

$$f(X) = \exp[-\pi \text{tr}(S \langle X \rangle, V)],$$

で定義する. ここで  $S \in \mathfrak{R}^+$ ,  $V$  は上で定義したものとすると,  $f(X)$  の Fourier 変換は

$$\hat{f}(Y) = \int_{M_{3 \times m}(\mathbb{L}_R)} \exp[-\pi \text{tr}(S \langle X \rangle, V)] \exp[-2\pi i \text{tr}(X, Y)] dX,$$

ここで  $dX$  は  $M_{3 \times m}(\mathbb{L}_R)$  上の Haar 測度.

定理 2.1 は、次の命題から証明される。

命題 2.2  $S$  と  $V$  を上の様にとる。すると、次式が成立する。

$$\hat{f}(Y) = \exp[-\pi \operatorname{tr}(S^{-1}\langle Y \rangle, V^{-1})] \cdot |S|^{-\frac{m}{2} \times 8} |V|^{-\frac{2}{2} \times 8}.$$

命題 2.3 同様の仮定のもとで、次式を得る。

$$\begin{aligned} (\operatorname{vol} \mathcal{L}) \sum_{M \in \mathcal{L}} \exp[-\pi \operatorname{tr}(S\langle M \rangle, V)] \\ = |S|^{-\frac{m}{2} \times 8} |V|^{-\frac{2}{2} \times 8} \sum_{N \in \mathcal{L}} \exp[-\pi \operatorname{tr}(S^{-1}\langle N \rangle, V^{-1})] \end{aligned}$$

命題 2.3 は、Poisson 和公式を命題 2.2 に適用して得られる。

また、その式は、定理 2.1 の式が、純虚なる  $Z \in \mathbb{F}$  全体に対して成立することを主張しているから、解析関数の性質から定理 2.1 が証明されるわけである。

注意。  $m \leq 3$  なる条件のときは、定理 2.1 は、 $V \in \mathcal{O}^+$  としても成立する。

### 3. theta関数と保型形式

lattice  $\mathcal{L}$  を、 $\mathcal{L} = \mathcal{L}_m = M_{3 \times m}(\mathcal{O})$ 、 $\mathcal{O}$  は integral Cayley 数のなす環、と置いて以下の議論において固定して考える。

次の補題が成立する。

補題 3.1 (1)  $\hat{L}_m = 2 L_m$ .

(2)  $\text{vol } L_m = (1/2^4)^{3m}$ .

(3)  $\theta_{\hat{L}_m}(Z; V) = (\text{vol } L_m)^{-1} \theta_{L_m}(Z; 4V)$ .

前節の定理 2.1 と上の補題 3.1 を組合わせて

$$\begin{aligned} \theta_{L_m}(-Z^{-1}; 4V^{-1}) &= (\text{vol } L_m) \theta_{\hat{L}_m}(-Z^{-1}; V^{-1}) \\ &= (\text{vol } L_m) |iZ|^{m \times 8} |V|^{3 \times 8} \theta_{L_m}(Z; V) \end{aligned}$$

を得る. ここで  $V = 2E^{(m)}$ ,  $E^{(m)}$ :  $m$  次単位行列, と置いてみる. すると, 再び補題 3.1 より

(i)  $(\text{vol } L_m) \cdot |V|^{3 \times 8} = 1$ ;

(ii)  $4V^{-1} = V$ .

これより, 最終的に

$$\theta_{L_m}(-Z^{-1}; 4V^{-1}) = \theta_{L_m}(-Z^{-1}; V) = |Z|^{4m} \theta_{L_m}(Z; V).$$

定理 3.2  $\theta_{L_m}(Z; 2E^{(m)}) = \theta_m(Z)$  と置く. すると

(1)  $\theta_m(-Z^{-1}) = |Z|^{4m} \theta_m(Z)$

(2)  $\theta_m(Z+B) = \theta_m(Z)$  for any  $B \in \mathcal{J}_{\mathbb{Q}} = \{X \in M_3(\mathbb{Q}) \mid {}^t X = X\}$ .

(2)の結果は定義にもとって  $\exp[\pi i \text{tr}(B \langle N \rangle, V)] = 1$  を

確かめればよい

#### 4. 例外モジュラー群 $\Gamma$

前記の例外領域  $\mathcal{F}$  の解析的自己同型群は, Freudenthal によって記述された [2].

$$W = X \oplus \Xi \oplus X' \oplus \Xi'$$

$X$  と  $X'$  は  $J_{\mathbb{R}}$  と同型なる  $\mathbb{R}$ -vector 空間,  $\Xi$  と  $\Xi'$  は一次元  $\mathbb{R}$ -vector 空間, とする

$E_7$  型の代数群  $\mathcal{G}$  は,  $W$  のある quartic form  $Q$  と, skew-symmetric bilinear form  $\{, \}$  を不変にする  $GL(W)$  の元となる群として定義される. (詳細は, [1] 参照). すると,  $\mathcal{G}_{\mathbb{R}}$  は例外群  $E_7$  の real form  $E_{7(-25)}$  である. さらに,  $\mathcal{G}_{\mathbb{R}}$  は  $\mathcal{F}$  上に推移的に作用し,  $\mathcal{G}_{\mathbb{R}}$  を  $\pm$  の center  $\{\pm id.\}$  で割ったものは,  $\mathcal{F}$  の解析的自己同型群  $Hol(\mathcal{F})$  に同型である.

$$\mathcal{G}_{\mathbb{R}} / \{\pm id.\} \cong Hol(\mathcal{F}).$$

$W$  の lattice  $W_{\mathbb{Z}}$  を次の様に定義する

$$W_{\mathbb{Z}} = X_{\mathbb{Z}} \oplus \mathbb{Z}e \oplus X'_{\mathbb{Z}} \oplus \mathbb{Z}e',$$

$$X_{\mathbb{Z}} = X'_{\mathbb{Z}} = J_{\mathbb{Z}}, \quad e = (0, 1, 0, 0) \quad e' = (0, 0, 0, 1).$$

$$\mathbb{Z} = \mathbb{Z}$$

$$\Gamma = \{ g \in \mathcal{G} \mid g W_{\mathbb{Z}} = W_{\mathbb{Z}} \}$$

とおく.

$\Gamma$  は例外モジュラ群と呼ばれ、その性質は Bailey によって詳しく調べられている。

定理 4.1 (Bailey) i) 群  $\Gamma$  は、その部分群  $\Gamma_B^+ = \{P_B \in \mathcal{G} \mid B \in \mathcal{J}_0\}$  と  $\mathcal{L} \in \mathcal{G}$  によって生成される。

すなわち  $P_B$  と  $\mathcal{L}$  は  $\mathcal{F}$  の元  $Z$  に、  
 $Z \cdot P_B = Z + B$   
 (translation),  $Z \cdot \mathcal{L} = -Z^{-1}$  ( $Z^{-1}$  は Jordan algebra inverse), と作用する。

ii) 群  $\Gamma$  は  $\mathcal{G}$  の maximal discrete な部分群である。

$g \in \mathcal{G}$  と  $Z \in \mathcal{F}$  に対して、 $J(Z, g)$  を変換  $g$  の  $Z$  における  
 函数行列式とする。  $J(Z, P_B) = 1$ ,  $J(Z, \mathcal{L}) = \det(Z)^{-18}$   
 $= |Z|^{-18}$  が確かめられる。そこで偶整数  $m > 0$  について

$j(Z, g)^{18m} = J(Z, g)$  を満たす保型因子  $j(Z, g)$  を固定する。  
 例外領域  $\mathcal{F}$  上の正則関数  $f(Z)$  が  $\Gamma$  に関する重さ  $l$  の保型形式であるとは、

$$\text{偶整数 } l > 0 \text{ について } f(Z \cdot \gamma) j(Z, \gamma)^l = f(Z),$$

$$Z \in \mathcal{F}, \quad \gamma \in \Gamma,$$

を満足しているときを言う。

これだけの準備のもとに 定理 3.2 は次の様に言い換えられる。

定理 3.2 の系  $\theta_{2m}(Z; 2E^{(m)}) = \theta_m(Z)$  は  $\Gamma$  と関する  
重  $2m$  の保型形式である。

注意,  $\theta_m(Z)$  の Fourier 展開の公式も 最近得られた。これ  
を用くと, 例外領域  $\mathbb{H}^2$  上の singular modular form の例が  
得られる。

### 文献

- [1] W.L. Baily, Jr., An exceptional arithmetic group  
and its Eisenstein series, Ann. Math., 91 (1970).
- [2] H. Freudenthal, Beziehungen der  $E_7$  und  $E_8$  zur  
Oktavenebene I, Proc. Koninkl. ned. Akad. Wet.,  
Series A, 57 (1954).
- [3] H.L. Resnikoff, Theta functions for Jordan  
algebras, Invent. Math., 31 (1975)
- [4] \_\_\_\_\_, Automorphic forms of singular  
weight are singular forms, Math. Ann.,  
215 (1975).